

オムニス関西

Omnis
Kansai

第1外科を率げて心臓移植に取り組んできたはずなのに、再開の喜びとともに悲しみが浮かんだ。だがその経験があったからこそ、一人でも多くの命を救うため、移植医療を「まともなことにしよう」との決意も固まった。

提供された臓器を長く生かし、移植を受けた人に幸せになってもらうためできることは何か。福嶋は強調する。「術後管理や心理的なケア。移植は天才外科医1人でできる医療ではない」。欧米より患者の生存率が高いのは、患者本人の努力に加え、術後管理が充実しているからだ。

国循で移植医療を支える中谷武嗣も阪大第1外科の出身だ。2000年、国循臓器移植部の初代部長とな

国循・阪大 けん引役

り、翌年に完成させた重症心不全移植病棟は、待機患者であふれる。

待機患者の多くは心臓のポンプ機能を補完する補助人工心臓を装着する。現在、承認されている唯一の国産の補助人工心臓は、第1外科の北村の同期でニプロ総合研究所人工臓器開発センター長の高野久輝が国循時代に開発した。その補助人工心臓の仕組みは20年前の開発当初と大差ない。

「企業技術生かせ」

人工心臓は移植の両輪として開発されてきたが、欧米で体内埋め込み型が数多く使われる一方、日本では治療や認可に時間がかかりまだ承認されていないから、高野に誘われ国循で開発をともに手掛けた妙中義

之・国循研究所副所長は、日本には企業の技術が医療に生かされにくい環境がある」と唇をかむ。

妙中は埋め込み型の開発を進める傍ら、昨年8月には任意団体「日本の技術をいのちのために委員会」を立ち上げた。医療事故を恐れて企業が開発に尻込みしがちな現状も踏まえ、企業技術を医療に生かす土壌づくりの必要性を説く。

阪大「第1外科」の名称は06年の組織改編でなくなり、心臓手術は「心臓血管外科」に引き継がれた。だが「出身者は国内のみならず海外にも散らばっている」。心臓移植を目指して阪大、国循をけん引した川島は満足げにそう語る。

敬称略
(大阪社会部 岡田直子)

川島康生

国立循環器病センター
名誉総長

北村惣一郎

国立循環器病センター
名誉総長

松田暉

兵庫医療大学長

妙中義之
国立循環器病センター
研究所副所長同センターで開発中の
人工心臓

初の脳死判定後、阪大病院で行われた心臓移植手術(99年2月、吹田市)＝同病院提供

心臓移植を巡る小史

- 1964 米国で男性にチンパンジーの心臓移植手術を実施
- 1967 南アフリカでヒトからヒトへの心臓移植、世界第1例目
- 1968 札幌医科大学の和田寿郎教授、日本第1例目
- 1985 厚生省(当時)研究班が脳死判定基準を初めて公表
- 1988 日本医師会が「脳死も人の死」との見解発表
- 1990 阪大医学部倫理委員会が心臓移植を承認
- 1997 10月 臓器移植法施行
- 1999 2月 阪大病院で臓器移植法に基づく心臓移植第1例目実施
- 5月 国循で第2例目実施
- 2009 7月 小児からの脳死臓器提供などが可能となる改正臓器移植法成立
- 2010 1月 法施行後86例目の脳死移植、70例目の心臓移植は阪大で実施
- 7月 改正臓器移植法施行(予定)

の魅力をそう話す。「第1外科は不夜城だった。遅れた日本で社会的な突破を目指す。それがイチゲ(第1外科)魂だ」。

心臓移植を目標の一つに掲げた第1外科は若く優秀な医師を引き付けた。今でも心臓移植にかかわる医師の多くが「イチゲ」出身。これまでに行われた70例の

近畿中央病院(兵庫県伊丹市)院長の白倉良太は学生時代、世界初の心臓移植のニュースを見て免疫学の研究から第1外科へ。川島らとともに臓器移植法の実現などに尽力した。

その移植法を改正し、小児からの脳死臓器提供などを可能にしようと動いたのが阪大病院の移植医療部副部長、福嶋敬徳だ。

福嶋は99年2月、再開第1例目の医師団の一員として、脳死状態のドナーから心臓を摘出した。高知から大阪の病院へ向かうヘリコプターの中、移植用の心臓が入ったクーラーボックスを抱えた福嶋は複雑な思いにとらわれたという。「ドナーは脳死者とはいえ、患者だった。医者として『助けたかった』」との思いが募った。

ひと脈々

手塚治虫の漫画「ブラック・ジャック」にこんな1話がある。夜間、容体のかしい子供を連れて町の医院に駆け込んだ貧しい母親。難病の川崎病と知らんだブラック・ジャックが偽

造小切手を受け取って心臓手術をする。

国立循環器病センター(大阪府吹田市)名誉総長の北村惣一郎は、講演でこの話の1ページを紹介することがある。「当時、新聞に出た僕の川崎病の手術の図と手塚の絵が似ている。取り上げてもらって光栄だ」。1999年、再開2

30年に及ぶ中断30年にわたる中断を経て心臓移植が99年、国内で再開された。1例目を執刀し

た当時の大阪大医学部教授、松田暉(現兵庫医療大学長)も「拡大鏡を使うわけでもない」。だが外科的な技術とは裏腹に再開までの道のりは困難を極めた。

「正月のたびに『今年こそお父さんは心臓移植をするぞ』と言いつつ、結局、嘘(うそ)をついてしまった」。日本の心臓移植再開に奔走した国循名誉総長の川島康生は昨年まとめた著書で、家族にこうわびた。

科の教授になったのは78年。60年代半ばに米国で心臓移植論争を見て「大学人は最先端を開拓するのが使命。これは日本に帰ったらやらなアカン」と心に誓った。阪大では研究会の立ち上げや脳死判定基準の策定など準備を着々と進めた。

欧米で心臓移植が定着する一方、日本で大きく遅れた背景には手術の是非を巡って検察当局の捜査に発展した68年の「和田移植」(その後、不起訴)がある。

川島は言う。「うさくさいと世間が見るようになったのは、脳死移植に関する医師間の意見対立も大きい。しかし心臓移植はいい治療。やらないのは怠慢だ」。国循総長としても環境整備に努めたが、定年のため思い半ばで退官した。

「今にも死にそうだった人が立って歩き、5年も10年も生きる。その効果はドoramachuckだ」。川島の意を継いで阪大第1外科の教授となった松田は心臓移植

心臓移植の7割は国循と阪大で実施された。2例目の北村も同科出身で、松田の1年先輩にあたる。

あふれる待機患者

近畿中央病院(兵庫県伊丹市)院長の白倉良太は学生時代、世界初の心臓移植のニュースを見て免疫学の研究から第1外科へ。川島らとともに臓器移植法の実現などに尽力した。

先端医療の梁山泊

3

心臓移植、受け継ぐ使命感